

# 地域医療の現状学ぶ

## 大分大医学科6年生

大分大学医学部医学科6年生が県内の8病院・診療所で2週間の実習を積み「地域医療実習」が本年度からスタートした。豊後大野市では、緒方町の市民病院（坪山明寛院長）が対象になっており、7月までに17人の「医師の卵」が地域医療の現状を学ぶ。



91歳の男性宅を訪問し、診察をする豊後大野市民病院で実習中の石垣さん

## 本年度から県内8カ所で実習

実習は、学生が受け入れ先で医師と一緒に診療にあたる中で、地域医療の現状と課題を学ぶとともにやりがいを感じてもらおうのが狙い。都市部の病院に医師が集中することによる地域医療の崩壊が全国的に問題になっており、同大は「地域住民のために汗をかき医師の姿や、医者と患者の信頼関係をじかに見ることで、地域医療に貢献するモチベーションが生まれれば」としている。



市民病院で「第1陣」として、19日から実習を行っているのは、稲田浩気さん(24) 熊本県出身・顔写真真石、石井悠海さん(23) 大分市出身・同左、石垣俊さん(25) 大阪府出身の3人。指導医と一緒に風邪や腹痛などの一般的な病気の診察をしたり、患者の自宅

## 豊後大野市民病院 「担い手に育って」

への訪問看護などを行っている。

「地域では、医者と患者の間に強い親密な関係が築かれている。都市部と違って病院が少ないので、より病院が頼りにされているんだと実感した」と3人は口をそろえる。

医師になったら地元の大分で働くことを考えていた石垣さんは、訪問看護で緒方町の91歳男性の自宅を訪ねた。看護師と男性が朗らかに交わす会話や診察中の男性がリラックスした様子から、「大分病院の患者よりも心を開いている」と感じたという。帰り際には男性から「(医者になったら)こっちに来てほしいなあ。頑張ってる」と声を掛けられた。「地域で働くという選択肢も生まれた。期待に沿えるよう頑張りたい」と笑顔で答えた。

坪山院長は「地域には、人と人の触れ合いという医療の原点がある」と強調。「実習を通じて、いずれは地域に残りたいという人材が生まれてほしい」と期待を寄せている。